どこでもない部屋

Paul Auster 作品における「ホテル」表象

植村真未

はじめに―「写字室での旅」を考える

『写字室での旅』は、ある老人ミスター・ブランクの、とある部屋での一日を描写している。老人にはほとんど記憶がなく、確かなことは現在が 21 世紀のアメリカ合衆国であるということだけである。語り手によっても、物語が始まり、そこで終わる部屋について、充分な説明はされない。まずは「写字室」がオースターにとってどういった場であるか確認するために、作家自身の執筆環境を見ておこう。オースターは、家では執筆を行わず、自宅近くのスタジオを執筆場所としている。そしてその部屋は、インタビューにおいて“monastic”と表現される。また、コンピューターは置かず、執筆の際には紙とペンを使用しており、それが思考に大きく影響すると語っている。写字室とはつまり、作家が修道士のように紙とペンを持ち仕事をしている執筆部屋であり、「写字室での旅」というのは、執筆部屋で作家が作品内に没入することを意味すると考えられる。本発表では、『写字室での旅』での作者(author)ミスター・ブランクと登場人物達のまなざしと移動性(モビリティ)を、間テクスト的解釈を通して透かし見ることで、ミスター・ブランクの部屋での出来事が、ホテルという写／移りかわる空間での作者と登場人物の遭遇であったことを明らかにする。

1. まなざしのポリティクス―作者を診／看る登場人物

『写字室での旅』では、これまで意のままに動かされてきた登場人物達が、作者ミスター・ブランクを監禁し、復讐を企てている。復讐の場となるこの部屋の調度品を見ても、ここがどういった部屋であるは判別がつかない。しかし、この部屋の訪問者を見ると、病院か監獄の二つが近いことが分かってくる。ミスター・ブランクの部屋を訪れる者は、それぞれ診察と、処置に関する世話のために部屋を訪れている。病気ではないにも拘らず行われるファーによる診察は、ミスター・ブランクの想像力を抑えることが目的である。アンナとソフィーは、ミスター・ブランクの身のまわりの世話、着替え、排泄の介助、洗濯を行っている。ファーの診察と、アンナとソフィーによる看護、この部屋では彼らがミスター・ブランクを診／看ているのである。ミシェル・フーコーが、医師たちが病気を知るために患者を「診る」ことの暴力性を指摘したように、この部屋にも、暴力性を孕んだ力関係が存在している。続けて、監獄として機能している可能性を分析した。ミスター・ブランクが、実際にこの部屋に監禁されていることが明らかになるのは、物語終盤のダニエル・クインとの会話からである。しかし、パラノイア的に、常にこの部屋には鍵がかかっているのかいないのかを考え続けていることに鑑みれば、この部屋は老人にとって、監禁されていることが分かる前も、常に監獄であり続けていると言える。

2. まなざしの移動性(モビリティ)

ジョン・アーリとヨーナス・ラースンは、フーコーが説明した医者が病態を見る「まなざし」を、観光理論に取り入れ発展させた。観光客が観光地を「見て」まわる行為は、訓練の上、習得される技能であると説明する。「観光地」は、旅行者たちが医師たちと同じく訓練された「まなざし」を機能させる場なのである。アーリとラースンが説明するには、「旅」は限られた人々にのみ許された、特権的なものであった。特権階級が旅を行い、一方の患者、囚人と同じく「見られる」ものである場所は「消費され、浪費され、使い古され」（アーリ 382）ていく。ここまでの議論から移動性(モビリティ)を持ち、観察を行っているのは登場人物達の方であるため、彼らが旅人と同じく「まなざし」を持っていると考えるのが妥当であろう。監禁状態にある上、体もあまり自由が利かないミスター・ブランクが観光地であるかのようだ。しかし、ここで立ち返るべきは、この観光のまなざしは一方向にのみ作用するものではないことである。

3. 遁走的移動性(モビリティ)

ミスター・ブランクは、かつて酷い扱いをした登場人物達に監禁され、この部屋を自由に出入りできない一方

で、登場人物達は自由に動き回れる存在である。しかし、アンナをはじめとする登場人物達は、ミスター・ブランクの与えた、任務に伴った「移動」を良き思い出とは思っていない。多くの者が、ミスター・ブランクに任務へと「送られた」ことに対し、非常に強い憤りを感じている。ミスター・ブランクの「任務」によって移動を余儀なくされた者たちが、送られた先でどのように過ごしていたかを見ると、『最後の物たちの国で』で、アンナは生きていくために街を彷徨い歩き続けていた。『ガラスの街』において、クインもまた、日中は街を歩き回り、夜は野宿という生活を続けていた。彼らは、自らの欲求により動いていたというよりも、むしろ衝動により街を彷徨い歩かざるを得なかったのである。アンナとクインに代表されるオースター作品の登場人物達のこういった様子は、アーリが説明する、衝動に苦しみ「遁走」する散策者と重なる。19 世紀後半のヨーロッパでは、徒歩旅行者は、精神病に罹っていると考えられるようになっていった。「遁走」、つまり、衝動に駆られて歩き旅をするのである。登場人物達と、ミスター・ブランク、彼らの移動性（モビリティ）の有無がこの部屋における力関係を表しているように思われた。しかし、観光のまなざしを考慮に入れ、登場人物達の移動をよく見ると、むしろ衝動的な「遁走」であることが窺い知れる。

4. 遭遇するまなざし

ジェイムズ・クリフォードは、人類学者のフィールドワークの「旅」としての側面に焦点をあて、観察の場であるフィールドを、ホテルのような場所であると喩えている。クリフォードは、人類学者が、フィールドに向ける観察眼の逆転可能性を指摘する。フィールドへの、あるいはフィールドからの近年の出入りの頻度を考慮すれば、フィールドは、むしろ「旅の遭遇の場」（36）であると説明する。このことに鑑みれば、人類学者が投げかける観察のまなざしは、決して一方向ではない。人類学者の眼だけが現地人を捉え、観察しているものとされていたが、実のところ、フィールドにおいて、人類学者も現地人の視線に晒されているのである。この関係は『写字室での旅』でのミスター・ブランクの部屋にも当てはまる。注目すべきは、ミスター・ブランクの想像力の中で、この部屋がホテルに接続された場面である。ミスター・ブランクはソフィーが食事の準備をしている様子を観察する。その際にクロッシュを目にし、思い起こすのは単にレストランなどではなく、ホテルのルームサービスなのである。また、クインと訴訟について話す際に、この建物がある場所について触れられる。その会話の内容から、海が近くにある、美しい場所であることが分かる。海が近くにある、美しい場所というと、「景勝地の観光（シーニック・ツーリズム）」の目的地の代表であるし、また、海辺の保養所が元々は治療を目的としていたことも、この部屋が病院としての機能していることと矛盾しない。医師がいて、看護体制がある、海の近くの美しい場所にある部屋は観光地の宿泊施設の一室、つまりホテルの一室に限りなく近いと言ってよいだろう。

おわりに

ミスター・ブランクは、『写字室での旅』の部屋において、登場人物たちの観察あるいは監視対象であるように思われた。しかし、登場人物達の持つ移動性（モビリティ）をよく観察すると、そこは逆転可能性を孕んだまなざしの往行する場であることが見えてきた。クリフォードは、ホテルをノスタルジックな場であると述べた。ミスター・ブランクの胸は罪悪感に満ちてはいるものの、『写字室での旅』は、どこかノスタルジックな空気を漂わせている。それはまさに、作者と登場人物達との邂逅の場となっているからだろう。そこは、ある物語世界から、また別の物語世界へ写／移る途中の作者と登場人物たちが出会う場なのである。

主要参考文献

Auster, Paul. *Travels in the Scriptorium*. Faber and Faber, 2006.
Hutchisson, James M. *Conversations with Paul Auster.* UP of Mississippi, 2013.
アーリ、ジョン『モビリティーズ―移動の社会学』吉原直樹、伊藤嘉高訳、作品社、2017 年。
アーリ、ジョン、ヨーナス・ラースン『観光のまなざし[増補改訂版]』加太宏邦訳、法政大学出版局、2020 年。
クリフォード、ジェイムズ『ルーツ―20 世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝他訳、月曜社、2002 年。